

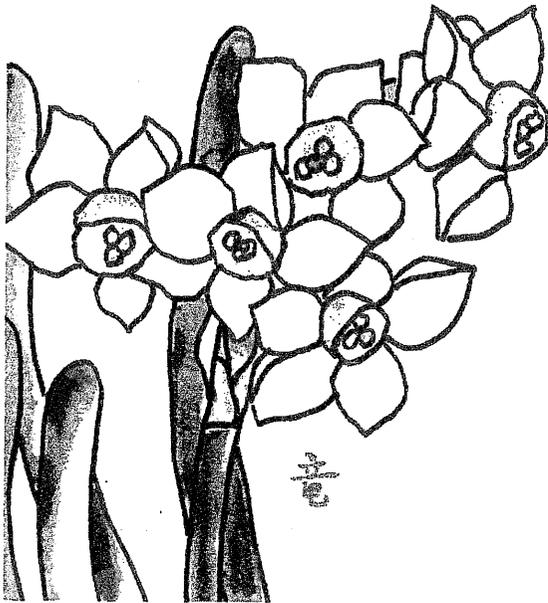
# オリーブの樹

第156号

2021年12月27日

## شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



軽石の  
埋めし沖縄  
辺野古の海  
自然も強権に  
抗いしごと

### 目次

- P 2 新年に向けて 重信房子
- P 4 秋の歌 重信房子
- P 5 独居より 重信房子
- P13 戦士たちのリッダ闘争(3) 重信房子
- P19 「ここは何処、明日への旅路」を読んで 重信房子

重信房子さんを支える会

## 新年に向けて

重信 房子

2021年、獄中最後の師走を迎えることができました。

若い時には「棄てては拾ってきた命」と粗末に扱い、また、獄中で癌に罹患して度々手術し、こんなに長く生きるとは考えられませんでした。

一方的な「使命感」、情熱、好奇心、そして「自分らしく生きたい」と闘いに邁進し、過ちや反省を繰り返しながら歩んできた人生ですが、思い通りに生きることができたこと、ありがたいことと感謝しています。

新年を迎える2022年は、私が5月28日に獄生活から解放される年でもあります。第一審判決を聞きながら「判決は終わりに非ず始りと服わぬ意志ふつつと湧く」と一首零れた裁判、そして受刑生活、振り返る時間というものは、何と短いことでしょう。この獄中21年を越える長い間、支え、叱咤、励ましてくださった友人、仲間、家族、弁護士、医師や更には「オリーブの樹」の読者として無言で支えてくださった方々にまず、感謝を伝えます。みなさんありがとう！

私が逮捕された時代を振り返ると、当時は今の厳しい格差の広がる社会、政治情況の始まりだったのだと思います。当時、パレスチナではイスラエルの暴虐に抗議する2000年9月28日の「第二インティファダ（民族蜂起）」が始まって、激しい攻防が繰り返されていました。そして、2001年シャロン政権が発足すると、パレスチナ自治政府のアラファト大統領府破壊が始まり、PFLP議長がミサイル攻撃によって殺され、「9・11事件」が発生しました。一方でIT革命による産業・社会の転換と「新自由主義」による人間社会と自然への徹底した市場化が「民主主義」の装いや「人権」「環境」すら掲げながら格差を広げました。

あの「9・11」を画期として21世紀は「反テロ」の名による侵略戦争が常態化し、「民主主義」の名によって、イラクからアフガニスタンに至るまで、中東はズタズタに破壊されてきました。今もその残骸に苦しめられているのは無辜の人々です。21世紀は「戦争と難民の世紀」と化し、加えて「コロナ禍」に示される新たな挑戦を受け続けています。それなのに、人間社会の「99%」ではなく「1%」の人びとが護られる世界が続き、格差は縮まるどころか拡大し、差別を肯定する強権的な政権が広がっています。

日本もまた、その間、憲法は骨抜きにされ、「集団的自衛権」は、既に様々な理由で自明のように機能し、防衛費増額、「敵地攻撃能力」が当然のように語られています。

その一方、計画が既に破産している「辺野古移転」が強権的に進められているところに、日本の未来の姿が示されています。日本語を愚弄するような美辞麗句のレトリックで強権が用心深く社会内部に浸入しているように思います。獄から眺める日本社会は、「人権」に鈍感な古い体質の一方で、コロナ対応に示されたように即応できず、世界に伍す独占企業への政策優遇や援護に尽くし、福祉から農業に至るまで、それらの独占企業の犠牲を負わしめる社会構造にあることは、はっきりしたと思います。その中で、人びとは平穏と幸せを求めて精一杯正直に生きています。

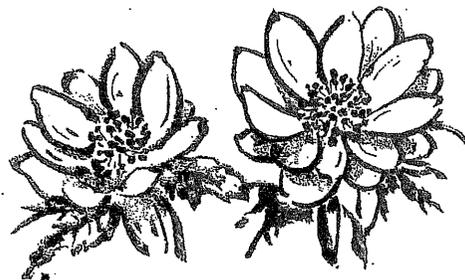
そんな風に私には映る日本、2022年はどんな年になるのでしょうか。来年は「沖縄復帰」50年を迎えます。50年前の5月15日、沖縄は「基地のない沖縄」の日本への復帰を求め続けましたが、「基地のない沖縄」どころか、基地を集中させられて、沖縄県民の苦労は続き、昔より露骨な「アメとムチ」の政策に脅かされ続けています。そしてまた、「連合赤軍事件」から50年目の2022年です。「世の中を変革したい」と多くの若者、市民たちが諦めずに反戦平和を求め、野党も政府に肉薄し、革新知事が主要都道府県で住民に選ばれた時代を思い返しています。なぜなら、私が革命を求めていたのは、そんな時代だったからです。連合赤軍事件は、党派政治の否定的姿を曝し、社会変革の希望や意義を逆流させるに余りある過ちと敗北を生みました。アラブに居たとはいえ、私もまた、その関係の一角に在ったこと、衝撃と反省と自責の念に突き動かされた一人でした。そしてまた、来年はPFLPの指揮下で闘われたリッダ闘争から50年目に当たります。50年を経ても、よくぞ闘ったと戦士たちへの感慨を新たに2022年を迎えるでしょう。

新年を見はるかせば、様々な感慨が浮かびます。世界は「民主」を求め「人権」を求め「気候正義」を求め、新しい秩序への胎動が感じられます。社会は、「9・11」以降、パレスチナでもアラブでも日本でも悪化し、コロナ禍が胎動を促しているように感じられます。私にとって、50年前の政治的意義——過ちも教訓も振り返る2022年になるでしょう。

私の出所を考える時、一方で岡本同志を始め、かつて共に闘った仲間たちに対する「国際手配」は続き、獄生活を強いられたままの友人たちが居ることを忘れることはできません。新しい胎動を望みつつ、私にできることは時間的にも能力的にもほとんどありません。それでも生ある限り、これまで歩んできたように世の中をより良く変えたいという志を持ち続けたいと心に誓っています。世の中も変わり、IT技術の変化、スマホや、ネットと高速化していく社会の中で、人として価値ある生き方を探しながら、まず心身のリハビリ、学習を通して、一歩一歩好奇心で楽しみつつ、また生きて行こうと思っています。そこから世界の希望と足元の連帯が生まれるかもしれません。

今、皆様の友情、義理、心情に心震わせながら、年を越えた再会と出会いを夢見ているところです。良い新年を共に！

2021年12月15日



# 秋の歌

重信 房子

飛行機にしがみついた群れ\*カンダタのケーブル空港米国の罪

曼珠沙華色褪せもせず風に立つ総身燃やした秋思わるる

悪いことばかりでも無い獄の秋白りんどうの一輪清しナガ

白萩の流れる白き風に揺れる友の訃報に立ち尽くして独り

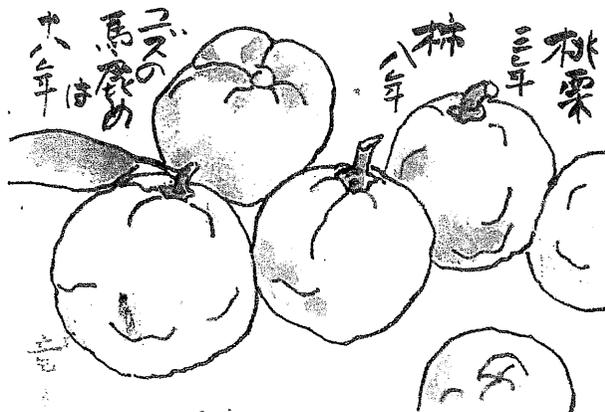
悲劇だと言われしことも時を経て価値あるものに変わる日が来る

吾亦紅摘みつ歩みしひと日あり若き憂国父は語りつ

車窓より流れる黄金こがねの稲架はな見つめ生き直そうと誓いし霜月

胸底の深き轍と辿り行けばバトルバックのオリオン星座

領土とらも水も時間も盗んでシオニスト大義とテロと弾圧続ける



\*カンダタは芥川龍之介の「蜘蛛の糸」の地獄の犍陀多を指します。

晩居よい) 8月28日~11月30日

## 命をつないで来年は出所できそうです

重信房子

8月28日 ISによるアフガニスタンの空港爆破でバイデン政権は報復を宣言し、一方で8月31日の撤退期限を延長しない(出来ない)と表明。日本人一人が救出されたとのこと。日本大使館員は館に戻り任務を継続すべきです。何も米の政策に乗ってタリバンをモンスター視する必要ありません。

9月1日 今日は教育プログラムの日。講師の話から彼の専門分野など含めて、いろいろなことを学びます。また、講師はある賞を先日受けて、その授賞式のスピーチで、私の「改善教育」に関わっていることに触れて述べられたそうです。自分も知らないうちに警察・マスコミ報道の側から私をとらえていたこと、会って話し、本を読み、違う人物として理解したこと、世の中の情報に乗かってしまうと、事実のようにそれを受け止めてしまう教訓と反省として語ったとのこと。真摯な講師の姿勢にありがたく、うれしく感じました。

夕方Nクンからお便り。来年元気で出てきてほしいと。もう何年も前から連絡をと思っていたとのこと。Nクンは覚えているかな……70年6月ごろのこと。現思研が赤軍派への参加で大学から出て行ったあと、学苑会で党派の内ゲバでひどい。何とか打開しなければ、NクンやKクンらが研究部連合会(研連)として対案を出すことにした時のことを私もそれを勧め、助言しました。Nクンに誘われてその作戦会議へ。どこだったか、誰かのアパート(中野か杉並か?)靴一杯の狭い入口からたくさんの仲間たちが話会っていました。私は大会にもオブザーバー席から下級生たちの活躍、対案勝利K委員長選出を見届けたのが、明大に足を運んだ最後です。Nクンは和尚が法要に来ていることを知っているのかわかりませんが、と

ても嬉しいお便りです。でも私から返事出せないのが申し訳ない。

9月3日 昼のラジオニュースで、菅首相が総裁選不出馬とのこと。再選の見込みがないと判断したのでしょうか。なりふりかまわぬ人事までカードにして、再選を目論んだのですが、逆に反発と不支持の流れに。当初からの、強権とぶれ続ける政治に、国民はもう我慢ならない思いだったでしょう。自民党は衆院選の敗北に危機感をもって引きずり下ろしたとも言えるでしょう。新しい総裁はまずもって、日本学術会議6名の不承認の撤回から始めること。コロナの立ち遅れも山積みです。

9月10日 腱鞘炎を悪化させつつ、作業も書き物もして、今日更に痛み。入浴後、湿布を貼ってもらって、少し良い。

「民主的アラブの国への道」チュニジア近現代史とブルバギ(鹿島正裕著)「NO NUKES VOICE 20」「テオリア」長船さんの一文、水谷さんのミャンマー問題など届きました。長船さんは、若宮さんのことと合わせて、誌的な文でふうさんを追悼しています。若宮さんが71年秋に赤軍派森指導部を批判しながら、アラブに来たいと連絡を受けたのを思い出します。赤軍派と分派闘争になりたくなかったので、本当は訓練のために来てほしかったけど、断わろうと奥平さんと決めました。M君からの手紙だったので、率直に書いたのです。彼が来ていたら、奥平さんたちと一緒に、リッダ闘争に参加したかもしれないと思います。そういう志の人ですから。

水谷さんの論文「日本政府・官僚・財界はミャンマー軍部クーデターの共犯者—日本のミャンマー政策の植民地主義の実態と本質を糾明する」を

読んでいるところです。ミャンマーに対する戦前の植民地支配が続いている姿を、歴史的に解明し、具体的に記してとても学習になります。ミャンマー軍の軍産複合利権集団は、エジプトのシーシ政権と軍に、とても似通っています。人民の要求に虐殺で答えることも。日本政府は対抗的に中国に対峙すべく、ミャンマーに肩入れし、その中枢当事者たちは大東亜共栄圏並みのミャンマー利用の姿が水谷論文に示されています。そして、ミャンマーの挙国一致政府・人民防衛隊を支持し、ミャンマー人民に支援・連帯をと訴えています。ミャンマーの置かれている位置、日本政府の戦略の一端をよく学べます。

9月13日 「9・11」20周年を盛大に米国が記念する時、過ちの戦争がアフガニスタン、イラク、その地域全般への侵略と破壊に終始したこと改めて実感します。同時にまた第二インテリファードに始まったシャロン政権の暗殺・虐殺政策とパレスチナ人民の抵抗とPFLP司令官であり議長のアブアリ・ムスタファアの8・27殉教も一連の出来事として思い返します。あれから20年、パレスチナもイランもレバノンも昔を知る分、怒りを禁じ得ません……。新世紀、米国政府の「反テロ戦争」は難民を膨大化させ、アフガンを含む中東全域を破壊し、今もその政策によって人々は生存の闘争を強いられています。

9月16日 昨日りんどうの白とピンクの2本、ケイトウのオレンジ色と赤の2本が届きました。今日はサブラ・シャティーラ難民キャンプ虐殺の



あの82年イスラエルベイルート侵略を思い出します。イスラエル軍とモサドが力づくで大統領にすえたブシール・ジャマイエルが大統領就任式直前に爆殺され、怒り狂ったシャロン国防相の指揮で停戦下の西ベイルートにイスラエル軍突入。シャティーラキャンプを包囲して、ブシールの軍隊レバニーズ・フォース(LF)をキャンプに入れ、数千人を16日~18日までの間虐殺させた日。39年目の今日なので、和尚の法要に追悼に加えてもらいました。「ノーニュークスボイス」29号を読んだところです。元福井地裁の裁判長で画期的判決を下した樋口英明さん、3・11前に2006年3月金沢地裁で日本で初めて北陸電力志賀原発の運転差し止めの判決を下した裁判官で、現弁護士の方の井戸謙一さんのインタビューはとても読みごたえがあります。こういう主体的な裁判官が今後も出て来ることを期待しつつ読みました。

9月24日 彼岸の秋分の日には夏のような暑さだったらしい。今日は免業学習で、「情熱大陸」のDVDをTV鑑賞の上、感想を書く。午後、M夫妻より祝誕生日のお便り。ありがたいことです。

9月18日は「プーマボイコット国際行動デー」で、世界の数十か所で行われました。日本も「プーマ大阪店」前で、街頭宣伝、11人。米国消費団体のプーマボイコット運動に、プーマのCEOが「話し合い参加」したとのこと。プレッシャーは効いているんですね。いいことです。

9月28日 朝から快晴です。珍しく運動でベランダへ。

今日は9・28第二次インテリファードから21年目です。ダッカ闘争の始まりも9月28日。44年前でした。私が生まれたのもこの日で、76年前です。みんなに助けられながら生きてきたなあ……と青空を見上げつつ、逝去された方々を含め、多くの友人たちへの感謝がこみ上げてきます。

今日は、誕生日を祝って下さった方々のお便りや、丁度いろいろ送って下さったものなど重なって、獄で迎えた最後のパースデイとして、きっと

思い出すだろう……と考えつつみんなの暖かいお便りなど受け止めました。来年の出所、みんなに迷惑をかけず、どう支え合って生きていけるだろうか……。心配よりもわくわくで困ります。真面目に考えねば！来年のバースデーは自由に乾杯したいです。

今朝、「現代日本・イデオロギー評註」を読み終えました。現代の相貌が描かれていて、私の発った60年代の日本と現在を行きつ戻りつ語られる文に、見えない世界が少し見えるようになった感じ。それに身の周りの楽しい（意外と酒飲みで食いしん坊）の日常も知り、楽しく読みました。監獄人権センターのニューズレターNo. 107 も受け取りました。

9月29日 今日教育プログラムの受講日で、外部の講師の話の最終日です。出所後の助言を伺い、いくつもの示唆を頂きました。講師は、私の生きてきた経験を活かして、<sup>いのち</sup>生命を大切に生き方を次の世代に語ってほしい。当初は、世間には嫌な思いや非難もあると思うけど、真摯な対話は良い結果をもたらすだろうと、助言してくださいました。この間、獄で初めて対話が成立するという稀な経験の中で語る機会があったこと、更に出所後も自分の生き方一失敗も過ちも楽しかったことも一を語ることを勧めて下さったこと、とても有意義な時間を持つことが出来ました。

今日も資料「プチの大通り」「10・8山崎博昭プロジェクトニュースNo.9」「パレスチナ子どもキャンペーン『サラーム』」など（パレスチナやシリア難民がレバノンで厳しい状況にあることを説明しています）。「プチの大通り」では智子先生が百歳となられたことを知り、祝！国からの百歳の銀杯や、市からの盾など贈り物拒否を貫く智子先生。今は新しい作歌はされておられないとのことですが、これまでたくさんの歌からいつも心に響く歌が載っています。若い時代の戦争空襲時代の歌も多いです。こんな数首が好きです。“焼けのこる仙台のわが家石垣の一角崩れコスモスの花”“空

襲に姉死すと電報届きしその夕べ庭に迷い来し一つの螢”“母と二人灯火管制下の迎え火を夕早く焚く淡き火の色”“首都は今さながらがれきの野となりて燃えながら夏の夕日没りゆく”この歌はペイルート 82 年夏地中海に沈む太陽の美しかった戦火の日々を思い出させます。

今日は教育のあとコーラスに少し遅れて参加。「川の流れるように」のあと、ハンドベルで「きらきら星」をみんなで演奏。最後は「花は咲く」。

9月30日 夕方Mちゃんから暖かいお便りにニンマリです。「お誕生日おめでとうございます！来年はメイちゃんと一緒に楽しみに」と。おいしそうなスイーツの写真を送ってくれました。「かんざらし」という長崎・島原の伝統的なスイーツとか。出所したら「かんざらし」を作ってくれるとのこと。白玉粉に少し砂糖と水を入れ白玉団子をつくり、ざらめ糖と蜂蜜の密を入れて氷水冷蔵庫でキンキンに冷やすのが「かんざらし」。あっさりとしておいしそう！

Mさんによると、コロナで若い人が釜の労働センターの手配師の仕事をしているようで、離職と貧困は深刻のようです。釜の組合は対応に懸命とのこと。

監獄人権センターのニューズレターでは、獄中者のカルテ開示訴訟、被収容者の医療を受ける権利など、最高裁判決の解説、学習になります。刑事施設のコロナ感染状況も出ていて、当東日本矯正医療センターも職員の感染多い！4/14～4/25二人、6/14～6/20一人、8/2～8/8一人、8/23～8/29一人、8/30～9/5一人と。（法務省のウェブサイトで毎月曜に発表）。受刑者患者の当センター感染者はいません。

10月8日 54年前のような青空です。ちょうど「10・8プロジェクト」からの資料も届きました。“弁天橋悼み置かれし白百合に無数の我らの夢の象見ゆ”“落暉浴び血色に染まる弁天橋砕かれ

し理想赤く燃えたつ「10・8プロジェクト」への連帯として詠みました。今日は、分類課より、仮釈放に関する「申告書」の書類を書くよう指示されました。自らの犯罪についての考えなど記す書面です。「公安事犯には仮釈は、ないのに書くのですか?」と聞くと、義務なのだそうです。ハーグ事件の無罪主張など記し、また出所後の展望なども書きました。

I さんからの資料「中東研究」など、学習したいもの届きました。課題など、今週末終えて、読んでみたいです。G さんからヘニング・マンケルの小説3冊。スウェーデンの作家でパレスチナ支援の人です。とても面白そう! (「白い雌ライオン」「リガの犬たち」「殺人者の顔」) 感謝。また、タリバーンに関する資料も興味深い。西欧側の「女性省から勧善懲悪省にかわった」と騒ぎたてるのは誤訳の極みであるという。「イスラーム研究者の責任は重い」と。「正しい訳は、「女性と子供の権利保護省」(正しい和訳は、家族法における女性の権利を守る省。『勧善懲悪』は中国古典『春秋左氏伝』成公が由来で無縁だ)との主張だとのこと。

10月12日 今日は、和尚の法要面会です。日

元氣 100% に  
さらす  
童



蓮御会式の法華經の由来の話をききました。またもう半世紀をはるかに越えた「10・8」も法要して頂きました。工場から戻って、入浴や診察や宅送便送りなどのバタバタもなく、今日はゆったり。と思っていると、オリーブの樹 155号が届いてとても嬉しい。編集室に感謝しつつ読み始めました。竜子さんのくちなしの絵もうれしい。紫陽花もひめひまわり、えのころ草も。いつも伴走して描いて下さって感謝ばかりです。戸平さんもありがたい。この間、「オリーブの会通信」を、きっちり発行されていて、いつも大切な情報源としています。今回は、長くなる難しいテーマのポイントをまとめて寄稿して下さいました。

元中核派のリーダーのM さんからのお便りに、「カクマルは別にしても、かつての三派、五派、八派という共闘関係をもっと大切に、大事に維持していくという意識性が、当時の私たちにあれば、ラジカル左翼の運動も少しはちがった発展をとげたかもしれないと、今さらながら無念の思いです」とあります。後世への教訓だけは、明確にさせておきたいと記しています。

10月13日 今日は、矯正指導日で休業日。衆議院選が始まるのですが、NHK ニュースの岸田首相発言のもちあげ方と、朝日新聞の批判(メーンの金融所得への課税とりけしや、平和主義理念封印など)のギャップ。朝日が国民目線で、NHK が政府広報というちがいなのでしょう。何のポイントも示さずNHK はたれ流し。現情の日本の「文化」では、まともや自公が、安倍路線で進むのでしょうか。どれだけ批判票が肉迫できるのかわかりませんが、「政権選択」と枝野代表が言う程なのと、ピンとこない獄中です。

デジカメ歌人「寒露」のお便り。伐採され、残っていた枝が地を這い、夏の花ムクゲを一輪咲かせた写真です。「ムクゲが強いと聞いていたがここまで強いとは驚きです。年寄り枯れてなお花を持ち続けたい」とあり、同感!

10月14日 当センターのディスクジョッキーが月一回あるのですが、私は作業に時間を取られて、ラジオを聞いていないのです。「どんな風なの?」と聞いたら、患者や経理さんと呼ばれる懲役で当センターで配膳・掃除など働いている人たちからの投稿文を読みあげて、リクエスト曲をかけてくれるのだそうです。投稿「小さなしあわせ」の話は、週一回黄粉が土曜日の朝食に出るのですが、その中に時々、砂糖の固まり（と言ってもほんとに小さい）があると嬉しくて小さなしあわせを感じます、という内容だったとか。ふうん、そっか……と、驚きつつみんな楽しみを見つけようとしているのだと納得した私です。

今日は衆院解散、立憲、「公正」を対立軸に、「共闘調整はほぼ完了」と、あります。まっとうな政治をめざそうと。岸田新政権が、ズルズルと日々、安倍菅路線にもどりつつあるのですが、政策で投票する層がもっと増えれば良いのですが……。政治の悪化劣化を押し留めるためには、私は、投票の義務化が何より大事だと思います。裁判員裁判よりはるかに、当初は、人気とり、金持ち優位としても必ず大多数の意志が、政治に向きあって、より良いものに刷新されるでしょう。政党も政府与党も人々の要求に真剣に向き合わざるを得なくなるでしょう。子供に至るまで、日常会話に政治があるパレスチナやアラブは、一人一人が、自分の考えをもっています。どんどん政治を語る社会になってほしい。

10月18日 工場作業の午前中、30分ベランダで運動です。寒く風が強い。もう秋なのを実感。景色が見えないので、青空のうろこ雲で感じる秋です。午後10月の花届きました。すすき三本、りんどうピンク色一本、赤鶏頭一本、野菊白一本病室に飾ると秋らしくなりました。丁度届いたIさんのお便りでは「前の田は稲刈りが終わって、はぎ架けの景色は何処で見てもホッと幸せな気分になります」金木犀の香りがするはずなのに匂ってこないらしいですが、秋の情景うかびます。

10月20日 斉藤幸平、藤原辰史さんらの「コロナ危機と未来の選択」(アジア太平洋資料センター編)、「ハルメク」も送ってくれました。斉藤幸平さんの労働と生産の変革による脱成長コミニズムは、とても卓見だと思います。どう実現するかも、現在の多様な運動・闘いのあり方を肯定し体系を与えており、未来を共通にめざす価値があります。

10月23日 資料整理をしていたら、前に小林さんが送って下さった74年の父の週刊誌のインタビュー記事。「世の中は革命なしにこのカネ、権力欲、地位保全の腐りきった社会は三木内閣でもよくなるまい」「例の三菱重工とか大成建設とかは世の中を革めようとする連中の仕業だと思う。もしそうなら僕はああいう行動を認めますね。僕は三菱重工の爆破事件を道義的に批判しようとは思はないんだ」と述べています。なるほど父らしいと思いつつ読んで、あれこれ思い出しています。リッダ闘争も道義的批判をナンセンスと言っていた父です。

10月26日 今日「明日、第一回目のワクチン接種が行われる」と告げられました。そのため、午前中は、ワクチン接種のため、居室で9:00~11:50まで作業。その間にワクチン。昼食後は、工場に出て、刑務作業とのことです。あすの予定のコーラスは、11月に延期になります。

10月27日 刑務作業を始めてすぐのころ、9:30くらいに問診票の再確認を医師が行い、その後10時ころ、病棟の各室に看護師が順次、ワクチン接種を行いました。作業を少し休むようにとの指示。その後、3回、看護師が「体調変化ありますか?」と、チェックに来て下さったが、とくに異常なし。作業を11時15分位で打ち切り、室内体操30分。昼食へ。12時半から、工場に移動して15:00まで。帰房後、看護師が体温とパルスオキシメーター測定。その後主治医が来室して、「体調変化ないか?」とたずねて下さった。「利き

腕にしたの？」と、ちょっとびっくりして腕が上がりなくなったりするので通常左腕にした方が良くいと助言して下さいました。今日よりも明日から2、3日腕が膨れる可能性を伝えて下さいました。

10・17の「変えよう！日本と世界」のプログラム基調パンフと、当日に各団体がまいたチラシ類届き、それを読んでいきます。そこにMさんの写真も届きました。10・17の円山公園！この日虹がかかったのですね。虹の写真きれいです。集会と祇園石段下から四条通りへのデモの姿。さわさわの旗。楽しい旗です。来年は参加したいです。

10月28日 大谷弁護士の久しぶりの面会。出所が近づいたせいか、先生の方にいろいろな要望が届いているようです。出版や取材など、今後検討していくことにしました。マスコミ関連は大谷弁護士に、公判時同様対応していただきたいとお願いしました。

10月29日 千夏ちゃんの新著「ふむ、私は順調に老化している」読み終えました。伊豆新聞に週一回、写真とコラムを連載して10年。その中のセクションで2020年春「マスクが消えた」から、2021年夏「オリンピックと戦争」が載っています。今を生きる、という意味で「ただいま」の身辺雑記コラムで、時事、庭の花の観察や思いついたことや子役時代と自由で含蓄のある文が魅力です。凛として素直で、理に叶っている論を謙虚に身にひきつけて語っているのがとてもいい。「そうそう」と思いながら読み終えてしまいました。

11月1日 もう11月。今日、総選挙結果の新聞を読みました。今後どれだけ野党共闘を「あたりまえ」に出来るか、また若い世代のリーダーシップの登場を促すなど、やり方をもっと検討する必要がありますでしょう。「維新」の躍進は「改革」「進歩」と誤解させる新自由主義の生活への浸透が深いことを示しています。これからも、もっと伸びそうです。野党共闘のアプローチが「保守」とみ

られているような今の日本の文化なのでしょう。危険な政治思想だな……と。「維新」のやり方を改めて思いました。改革の具体性で勝負できれば……。

11月8日 今日は「逮捕記念日」です。長い道のりだった筈ですが、ふり返る21年間は、短く感じます。あの日から今日まで多くの人々に支えられながら、命をつないで来年は出所出来そうです。支えて下さったみんなに感謝しています。あの日 of 被害を与えてしまった方たちや、その影響を受けた人たちに改めてお詫びします。そしてこの21年の間、支え励まして頂きながら再会の感謝もお詫びも伝えることが叶わないまま、数えると30人を超す人々を彼岸へ送ってしまいました。是非会って話したかったひとりひとりの顔が浮かびます。この日は自分をふり返ると共にそれらの方々を悼む日としています。

そんな夜、丁度私の原稿「遠山美枝子さんへの手紙」(以下「手紙」)に対して、遠山さんの御家族の諒解をとっていないことを、ある人から指摘、批判されて、初めて気付きました。批判されて初めてその配慮が欠けていたこと、礼儀も思いやりも欠き、思い及ばなかった浅慮を恥じています。まったく申し訳ないことをしました。遠山さんが辱められたままであってはならないと、一方的な考えで御家族の諒解を得るという発想すら欠けていたのです。リッダ戦士たちのことを書く思いと同じように……。心を込めて書いたつもりでしたが、その意味も失わせてしまいました。

11月9日 十一月の御題は「十一月」です。「車窓より<sup>こがねいろ</sup>黄金色の<sup>はき</sup>稲架見つめ生き直そうと<sup>ちか</sup>誓いし霜月」これは逮捕され、新大阪から東京へ連行される新幹線(車掌ルームで男女2人ずつの付き添い)の車窓から次々と流れるみごとな稲架に感動していた日のことです。「ようし、これからは本名で生き直そう。それまで何十年も封印してきた本名の上になりたつ自分自身を育てよう、学ぼう！」と

決めた11月8日の日を詠んだものです。“稲架の季節十一月のフクシマのコンバインが刈る稲棄てるため”これは新聞で読んだ試験的に育てられた稲の放射能汚染度を測って廃棄するためのコンバインを知ったためです。その一首です。

11月10日 今日2回目のコロナワクチンの問診票の書き込みをしました。来週から2回目のはじまるのかと思います。本や資料届きました。山形県おきたま置賜の農業菅野芳秀さんの「七転八倒百姓記」の本やいろいろ興味深いもの。プロレタリア11/1号、創12月号なども受け取りました。

11月11日 今日届いた「テオリア」110号に「岸田政権の継続と立憲野党・敗北をどう見るか」と総選挙の分析記事野党の危機が載っていて興味深いです。立憲は争点をもっと一般の人にわかりやすく、余裕あるトーンのスピーチで語らないと今後も特徴がはっきり伝わらないと思う。「市民連合」が野党共闘のイニシアチブをとってきましたが、まだ国民にいきわたっていないだけで、今後も「共産党と組むのか!」という逆風にめげず、旗色鮮明に(たとえばそれを「れいわ」や「維新」からも学習して)反自民戦線を打ち立ててほしいものです。無理かも。

瀬戸内寂聴さんが逝去されたニュースを聞きました。先日、大谷弁護士が面会に見えた折、「出所したらすぐ寂聴さんのところに行きましょう」と言われて、ひとしきり寂聴さんの話をしたところでした。5月15日、沖縄の日であり、ナクバの日が誕生日の寂聴さんに、百才の祝を少し遅れて伝えましょうと。何度も東京拘置所に面会に来て下さり、大阪の医療刑務所で、初めての癌の手術を終えた直後にも面会にみえて励まして下さいました。心は自然体で、ずっと自分の意志を貫いてきた人の余裕と思いやり、他者の喜びを自らの喜びとする人です。革命的心情に共感しました。それに、面会室に入ってくる時の、スキップでもしそうな若々しい急ぎ足で、強化ガラスに手をあてて



にこっと「元気?!」って、寂聴さんは少女のような初々しさと同時に庵主の慈愛のあふれた方でした。きっとたくさんの友人と彼岸で会い、また、好きな書きものを続けることでしょう。天寿を全うされたことを祝しつつ御冥福を祈ります。

11月17日 ワクチン2回目接種。朝医師が、最後の問診票記入に巡回し、「2度目の方が副反応が強いですよ」とおっしゃっていました。その後10時前、看護師のワクチン接種。とくに変化は感じられず、工場作業へ昼食後12時半より。少し膨れた程度。左腕にしたので作業にも支障はありません。

11月18日 この間パレスチナの危機的な厳しい現状が伝えられています。一つは、10月22日、ガンツ国防相が、パレスチナの市民団体(国際NGO含)6団体を「テロ組織」として指定したとのこと。実際の「非合法化」にあたります。パレスチナ市民社会の土台を解体しようとする行為であり、その団体がイスラエルにとって脅威であることを証明しています。口実は、PFLPとの関係があるということにすぎず、何の証明もなく、いいがかりです。六団体とは、①アルハク・人権NGO・法と人権保護、イスラエルの戦争犯罪告発など、②ジザンセンター・貧しい人々の救済・社会的政治



あの方を問うた歴史を記しているのを読みました。丁度読んだばかりの星野医師追悼の「そしてみんな生きていく」に、つながっています。

11月2-6日 免業矯正指導日。今日はDVDで「ゼロからの風」(塩屋俊監督・田中好子主演)の交通事故で愛息19才を喪くした母の闘いを見ました。危険運転の交通事故致死傷の刑法改正をちとる闘い。加害者の謝罪に「死ぬまで許すことはない」という言葉が胸に残りました。

11月3-0日 11月尽。ちょうど50年前、連合赤軍による雪山での共同訓練がこの頃から始まりました。団結を求めつつ、客観社会を喪失し、主観的な「団結」と「総括」によって、「個の強化」

を求め、組織を個々に解体させて、死へと突き詰めて行った50年前のはじまりです。そして新年には一つの新党を結成しました。この新党の処罰による「共産主義化」は、繰り返して死をもたらす、破産していきました。この過ちに満ちた中であつたとはいえ、純粹・純情な革命精神は強いられた対権力への挑戦として、死力を尽くしてあさま山荘での闘いに至りました。真心を尽くして革命家であろうとした思い。何が何だかわからない「総括」の混迷の中で必死に革命を求め、権力と闘おうと対峙し続けた同時代の仲間たちを思うと、悼みと哀しみが湧きます。連合赤軍事件の犠牲が革命の財産になりきれていないことが、この哀しみの極みです。

## 戦士たちのリッダ闘争(3)

重信房子

### 3 様々な変化の中で

秋らしい季節となってきた11月。それでもペイルートの地中海に突き出した岬の岩場には、春から咲き始めた春菊がとところどころに咲き誇って花をつけている。この岩場から海へ100mほど、海岸通りコルニッシュからも100mほど先の海にそそり立つ「ピジョンロック」の頂点もまだところどころ緑に覆われている。このピジョンロックはレバノンの観光写真に登場するペイルート名所である。

海岸通りの高台にある地形から何千万年前に引き裂かれて海中に残ったピジョンロック。高台と同じ高さのままで海にそそり立つ景観を作っている。

その海岸通りの近くに日本大使館のビルがあるため、日本人会の友人たちとピジョンロックの海を見下ろすカフェテリアで中東情勢や情報を交換することが度々あった。この海岸通りから西へ沈む太陽の表情は実に荘厳で美しい。夕方になると

太陽が雲の裏側に光を放ちながら地中海に静かに少しずつ消えていく姿は息を呑むほど美しいサンセットだ。太陽の丸い頭が消えた直後は、イスラーム教徒の一日の始まりの祈りである。イスラーム暦では日没で一日が終わり、日没から日が改まり新しい日が始まる。淡いオレンジ色や瑠璃色に踊る光を浴びながら、イスラーム教徒が岩場に小さなカーペットを敷いて、マグレブの祈りを捧げる所作はとりわけ美しい。

人間の一心に祈る姿の美しいことを私はこの街に来て知った。

この11月頃には、いくつものことが起こり始めていた。

パレスチナ解放闘争について日本の人々に知ってもらうために訪日していたPFLPの仲間が戻って来た。そしてアルハダフPFLP事務所で開催された報告会が行われた。パレスチナ戦場を巡って撮影された若松・足立監督のドキュメントフィルムは、「赤軍—PFLP・世界戦争宣言」の名で上映さ

## オープの欄 第156号

れたこと。日本では「赤軍—PFLP・世界戦争宣言」を上映するために上映隊が組織された。一台のバスを赤く塗って、そこに上映隊が乗り込んで全国キャラバンし、各地で大学や求められる場に行って映画を上映し、討論し、パレスチナについて語り合う方式がとられていたという。大学では他の党派グループもいて協力してくれたり、妨害されたりしたが、キャラバンは楽しかったという。日本ではベトナム反戦闘争やベトナム人民への連帯は圧倒的で、パレスチナ連帯はこれまで知る人も少なく浸透していなかったが、赤バス上映運動キャラバンは初の大きな試みになったと思う。しかし上映隊や足立監督らを公安当局は厳しく監視・尾行した。そしてついには足立監督と共にPFLPの友人も止められ尋問されたという。またPFLPの友人には「赤軍派と会わない方がよい」と私はアドバイスしていたが、リーダーの森恒夫さんが会いたいということで会ったという。何度も尾行を撒いて行き着いたところは大学だったが、そこで話をしたとのことで、PFLPやパレスチナの闘いの現情を伝えたという。

ちょうど訪日報告会の頃、若松・足立監督の依頼を受けて、彼らの友人のカメラマンがその映画



フィルムを持参して来た。友人の松田政男さんもその件で到着した。同じ頃、ひょっこりPFLPを訪ねて来た北沢正雄さんの協力で映画の内容を翻訳したり、それをアラビア語にさらに訳したりと、多忙になっていた。北沢さんはアジア・アフリカ(A・A)連帯委員会の日本の代表でカイロに長く滞在していた。中ソ論争で、A・A連帯委員会も分裂したらしい。北沢さんは中国の立場を支持して、ソ連の「プラウダ紙」から名指して批判され、また日共とも対立になったという。国際会議などで活躍してきた人で、カイロに駐在した後、ニエレレ・タンザニア大統領の招きでアフリカに行き、その後、中国共産党の招きで北京に行く途中ペイルートに寄ったのだという。パレスチナの新しい動きを調査研究するつもりでアルハダブ事務所を訪ねて来て、ぱったりと北沢さんに私は会った。「君は日本人かね。パレスチナに? 赤軍派? それは何だね? 日本のことはさっぱりご無沙汰していて知らんが、中・ソ潮流の他に武装闘争を掲げるそういう勢力がいるのかね、それは驚いた。じゃあ君たちの仕事に協力しよう」と、ペイルートに留まった。偶然カイロ滞り時代に、よく世話になったという留学生だった菊地弘さんが、共同通信記者としてちょうどペイルートに赴任していたので、そこを根城に「もう行かないと……。周君が待つとるんだが……」と言いつつ本人はペイルートが気に入ってずっと居続け、通訳、翻訳と助けてくれた。「周君って誰ですか?」と聴いて、中国の周恩来首相のことだとわかった。

菊地記者の父親は中国の作家郭沫若と親しく、よく支援していたようで、その関係もあってか、日本でアジア・アフリカ語学院という当時唯一のアラビア語もスワヒリ語も学べる学院を運営していた。飲むのはやぶさかでない北沢さん、松田さん、菊地さんや読売カイロ特派員の浅井信雄さんに私や信原孝子医師も加わってよく討論した。パレスチナ革命、第三世界の革命と帝国主義本国の革命の結合についていろいろ議論をした。超豊富

な国際交流の経験に裏打ちされた北沢さんの話はみんな感心して学習した。北沢さんいわく、今や革命根拠地はキューバからアルジェリア、タンザニアの首都ダルエスサラームからベイルートだという。今や革命家の結集地点はベイルートだという北沢さんに私たちも大いに賛同した。映画のフィルムは松田さんや北沢さんらとアルハダフやキャンプで上映した後、中国へ訓練に出発するPFLP代表団と北沢さんとで話し合っ、「周君にも見せよう」ということになり、北京へ運ばれた。その後の反応は聞けなかった。PFLPは72年に入ると党内闘争が激しくなっ、留学訓練代表団が呼び戻されたり、混乱していたことも重なったためである。

訪日していたPFLPの仲間の話で、ハバシユ議長の手紙も出版して公表することもわかった。また会った時、赤軍派の森さんからは軍事訓練や人材派遣の話も特になかったという。この間ずっとすれ違いだったが、どうも考え方の違いが大きいと実感した。この頃、やっど日本の本部からの手紙が届いた。私の方はこの手紙を読んで、これまでの不満もあり、また国内の困難を慮ることが欠けていたのかも知れないが、対立を決定的にしまった。私たちが海外に出て、様々な人々、ボランティアや革命組織の人々やいろいろな人と話し、日本の新左翼党派の思い上がりを恥ずかしく思っていたところだったので、余計反発したのかも知れない。本部の手紙は、「PFLPの諸君は哲学が無い」の一言でパレスチナ問題を片付け、国際党派闘争を行うべきだと主張し、当時アルジェリアに一時避難亡命していたブラックパンサー党のエルドリッジ・クリーバーとコンタクトしろ！などの任務指示があった。何が国際党派闘争だ！と思った。何が「哲学が無い」だ。赤軍派こそじゃないか。訓練人材の派遣には触れてもいず、パレスチナのことを赤軍派の宣伝にしか考えていないのではないのか？

PFLPの友人は日本の人々にパレスチナ問題

を伝えるために行ったので、彼の安全上の条件を考え、赤軍派とは会う必要はないと遠山さんを通して伝えた。その上せっかく会ったのに学ぼうとせず、「哲学が無い」の一言で片付けるとは……。ハバシユ議長の手紙の公表も釈明はない。毛派と連合赤軍（当初は「統一赤軍」）を結成することには反対し、「ソ連社会帝国主義」とする中国の「反社帝論」が第三世界で米帝や植民地主義に有利な状況をつくっていることも伝えた。それらにも答えてくれない。そして、本部の決めた「連合赤軍」結成方針を賛美し、それに反対する者も党内に居るらしく、「左右の日和見主義」が党内に発生していると書かれていた。右の日和見主義は「大菩薩峠事件」で逮捕され保釈された人々、左の日和見主義は釜ヶ崎組だと述べ、君たちは中央へ結集し従うように、という一方的な内容であった。「国際根拠地論」はどうなったのか？こちらの現実を分かろうとしない。その上、「左右の日和見主義」というが、その中身が知らされず、従うことだけを要求する。私自身が赤軍派と同じような「自分たちが闘っている」といった一方的な「使命感」という過ちを背負っているのに、自分のことは棚に上げて、もう、やってられないという思いが噴き上げてしまった。

あんなに好きだったプント、赤軍派。当初からの闘いで獄中に捕らわれている仲間たち。そこから離れて私は本当にこれからやっていけるのか？アラブの地、海外に出て、日本の母体を失うのは簡単なことではない。しかし母体はその役割を果たしてくれない……。悩みつつ考え、もう一緒にやれないと思った。まだ「連合赤軍事件」が顕在化する前の71年11月である。そのうち、今の森指導部が潰れて、もっと真つ当な再編が行われるだろうという思いもあった。すでにパーシムの仲間たちは赤軍派が応えてくれなかった活動を担って、パレスチナ解放闘争に参加し戦場に居る。私は、軍事担当外なので側面的な共同しかできない。もう決断する時だと思った。そうでなければ

「本部待ち」になって、パーシムもこれ以上前に進めない。すでに私たちの活動は独断先行ということになるのだろう。当時の私は武装闘争によって状況を切り拓くのだという軍事を第一とする考え方に立っていた。パーシムもそうだった。パーシムと話合った。その上で、私たちは赤軍派森指導部に決別を告げざるをえないという結論に達した。そして私が手紙を書いた。手紙の最後に、「こちらの手紙を読んで、本当に共に闘うなら、中央の責任で回答すべきだ。回答がなければ別個に進む」と記したが、返事は無かった。後に連合赤軍事件を知って分かったのは、その頃、森指導部は国際根拠地論を取り止め、国内建軍路線を採用していた。そして毛沢東派の「革命左派」に倣って、日本の山林を根拠地として闘う闘い方にすでに変わっていたようであった。私たちが必要としても、彼らは私たちをちっとも必要とは考えていなかったのである。

私たちがアラブで森指導部に決別宣言を出した直後、関西の友人たちから手紙が来た。若宮正則さんがアラブの私たちに参加したがつているので派遣したいと。私とパーシムで話合った。人材は必要だし、私は若宮さんの純粋な信念をよく知っている。神奈川での集会にふらりと訪れて参加し始めた生粋の労働者で、誘われて大菩薩峠の訓練にも参加し逮捕されていた。友人たちは森指導部を批判していて同感だった。でも、ここで若宮さんを呼んでしまったら分派闘争になってしまう。人材はほしいけど、赤軍派の人は、決別する以上呼ぶことはできないと思ってパーシムにそう言った。彼もうなずいていた。若宮さんが来ていたら、パーシムとパレスチナの人々に共感し、一緒にリッダ闘争に加わったかも知れない。若宮さんがずいぶん後に、ペルーで殺されたのを知って、どうしてあの時呼ぶことができなかつたのか……と思いついた。

もうひとつは、PFLPの事情があつた。PFLPの内部で矛盾が激化し始めていた。

11月から12月にかけて、パーシムまたはサラハ、時には二人一緒に会い、話をするが多かつた。そんな時にはDさん宅でDさんの友人たちと一緒に雑談を楽しんだ。彼らは私たちのことを詮索することはないし、アラブ社会の常識や戸惑ったことなど、相談すればいつも助言してくれた。PFLP内部で「アウトサイドワーク」局への非難があるようだけど？ と、そんな雑談の時に聴いてみた。南部のレバノンに駐留するコマンドたちから、アブハニ部局は財源を独占し秘匿しているなどの不満を何度か聞いていた。

PFLPの母体は1952年頃から汎アラブ規模で反帝・反シオニズム・反植民地闘争を闘ってきたアラブ民族主義運動（ANM）であつた。ANMはペイルートのアメリカン大学の医学部学生だったジョルジュ・ハバシュやワディーエ・ハッダード、アラブ大学のナイフ・ハワトメらが創設し、アラブ全域に広がった地下組織を持った大衆運動機関である。アラブ各国の自国政府打倒を目指しているので組織自身地下組織とならざるをえない。インテリや富裕層が啓蒙し、各地の国家の域を越え、アラブは一つであるとする立場にあつた。「アラブ革命なしにパレスチナ革命はない」と、いわばアラブ・パレスチナ同時の反帝反植民地闘争を訴えて闘ってきた。

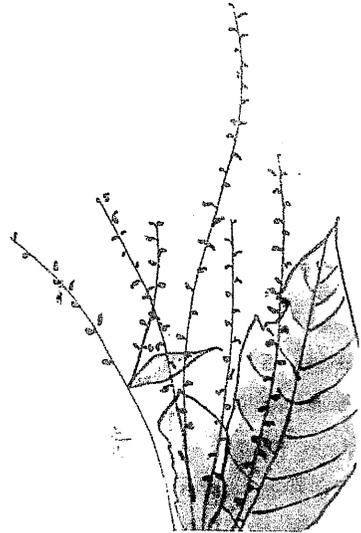
67年の第三次中東戦争を経て、ANMのパレスチナ支部を中心にPFLPが結成されている。第三次中東戦争ではイスラエルの先制攻撃を受け、アラブ諸国はイスラエル軍の空襲によって闘う前に戦闘機がほぼ壊滅する被害に遭い、短期に国連安保理の停戦を受け入れた。敗戦である。

この衝撃に、パレスチナ人は覚醒させられた。これまではアラブ諸国の軍事力政治力に頼って祖国パレスチナが解放されることに望みをつないできた。この敗北の中から、パレスチナ人は自らの力で闘うことによって祖国を解放することを決めた。アラブ諸国に頼っていても解放は難しい。アラブ連盟の「お飾り」の亡命政権のような「パレ

スチナ解放機構（PLO）」ではなく、ベトナム人民が闘っているように、人民戦争戦略のもとに自ら主導的に闘うことによって祖国を解放しようという気運が高まった。もちろん、これまでも座していたわけではない。パレスチナ解放軍（PLA）はエジプト、シリア、イラクなどに駐屯し、その国の軍隊の指揮下で闘ってきた。またANMはナセル政権の協力の下、被占領地パレスチナで潜入ゲリラ戦を闘ってきた。しかし67年の戦争によってパレスチナ全土が占領され、シリアのゴラン高原の一部、エジプトのシナイ半島などのアラブ領土もイスラエルに占領されてしまったのである。

この敗戦を機にANMはすべてのパレスチナ解放を目指す勢力に、ベトナムやアルジェリアに倣って「パレスチナ解放人民戦線（PFLP）」をパレスチナの統一戦線として結成しようと呼びかけた。しかし、当初話合いに参加したファタハが独自に闘いを続ける道を選んだ。そのため全パレスチナ勢力の統一戦線が作れない条件で、ANM・パレスチナ支部を中心に、当初の「PFLP」の名を残したまま、統一戦線組織としてではなく、労働者階級の党を目指すことにした。こうして67年12月PFLPは結成された。ANMは汎アラブ規模の組織であったので、ANM南イエメン支部は67年に南イエメンの人民革命を成功させるなど、当初は大いに力があつた。そしてPFLPは各国のANMメンバーにも支えられてきた。これまでANMは「アラブ革命なしにパレスチナ革命はない」とアラブ革命の中心として、反シオニズムパレスチナ解放を闘ってきた。

しかし、PFLPはパレスチナ解放第一に転じ「ANMあつてのPFLPであつてはならない」と、パレスチナ人民に依拠するパレスチナ革命の主体強化を目指してきた。「みなアラブ人じゃないか」「アラブは一つだと訴えてきたのに」……。こうした組織再編などで、みなアラブ人ながらパレスチナ人と非パレスチナ人、ANMの民族主義



的な古い富裕層のメンバーを快く思わない難民キャンプ出身の若手のリーダーたち。イラクのANM支部出身でバース党政権から弾圧され自国に戻れないのに、PFLPとイラクバース党政権は友好的なのはおかしいe t c。古い民族主義・非ML主義勢力の右派を批判し、ML主義強化を訴える自称「左派」が批判を活発化した。こうしたリーダーたちの何人かは南部の軍の司令部にいた。彼らはイラク出身者たちだった。南部の多くのコマンドたちは「左派」を支持していた。自分たちは苦勞しているのに、「右派」は我々に財源を回さず安全に暮らしている、といった素朴な不満が広がった。

私は足立監督と南部レバノンを巡ってドキュメンタリー映画撮影の滞在から知り合った戦士たちが休暇でベイルートに来ると話をしていた。彼らの純粋な怒りは分かるが、その原因は必ずしも正しい情報に基づいていず、リーダーシップ内の論争が歪んで下へと降りているように思えた。「左派」を自称する彼らは「アウトサイドワーク」のアブハニを槍玉に上げていた。党の中に秘密を作り、ANMのブルジョア階級の者たちとつながっているという批判である。それはアブハニの周りで活動している人々を憤らせた。アブハニこそが

## オリーブの樹 第156号

日夜対イスラエル戦に身を粉にしているのだと。サラハやバーシム、私はDさんからPFLPの歴史を聞いたりして私たちも理解していた。

もう72年に入ってからだったが、終いにはアルハダフ事務所に抗議の占拠に来る南部からのコマンドたちの部隊も居た。その度にガッサン・カナファーニや全軍司令官のアブアリがコマンドたちを説得しては帰らせた。占拠に来るコマンドたちは目をとがらせ武装している。それでもアルハダフで私を見かけると、「やあ、マリアン、元気？」などとニコニコしている者も居る。「大衆そのものだからなあ。そこがいいところなんだ。コマンドたちは」。いつもバーシム、サラハは普通に暮らす人が立ちあがっている人民戦争の最下層の人々の仲間である。それが羨ましい闘いだと京都九条のセツルメント運動のことを思い出しながら話っていた。サラハもPFLPの論争のなりゆきや展開を笑いながら話をしていた。「そんなことはない、デマだ」と、アブハニ部局を擁護すると、「うそだ!」というのに対して「もし嘘だったらヒゲを半分そって、逆立ちして歩いてやる!」というのを聞いて、私も笑ってしまったが、ヒゲは名誉の象徴だと知った。

バールベックのジャリール難民キャンプの住人の間でも論争があるらしい。バーシムよりサラハも話っていたが、ユセフも記している。ある日、訓練教官が食事の準備中に帰って来た。彼が難癖としか言いようのない態度を示したことがあった。



用意していた食材をゴミ箱に捨てて、メシを喰わないのは度々あることだとわめき散らした。バーシムはその教官に静かに話しかけ、「メシを喰わないなら喰わないでいい。しかし説明なしのやり方ではお互いにやっていけない」と忠告したという。教官はバーシムの態度にすぐさま謝罪し、状況を説明した。アブハニ部局、自分たちが不当に貶められているということを説明し、自分たちの立場を弁明はしたが、反対派を非難はしなかった。この教官は自分の態度を恥じ、それ以降、他のPFLP仲間から不躱な対応をされたことは二度となかったという。ユセフはバーシムの毅然とした態度がそれを引き出したのだろうが、日本で権威を笠に着たり、気分で揺れる対応を見慣れていたユセフたちには信じ難い率直さであったという。

「日本での人間関係のあり方と違うなあ」と本音をぶつけ合い率直なパレスチナ人たちの人間関係には圧倒される。でも、自分もそうしてみたら、とても開放感があり、人間関係が苦にならなくなったとバーシムも言っていた。この教官はバーシムたちが闘い、戦死した後、何年にもわたって、バールベックで若手教育を担当し、日本人战士们のエピソードを語り、「バーシムたちのように生きろ」と、自分が学んだことをいつも涙を浮かべながら語り継いでいた。

党内闘争の激化は結局72年3月には党大会方針・人事をめぐる分裂に結果していくことになる。自称「左派」は党大会をボイコットし、「革命的PFLP」を結成した。だが一ヶ月も経たないうちに空中分解してしまった。レバノン南部の司令官ら「左派」のリーダーたちは指導部間で再び対立し、コマンドたちはリーダーたちを批判し、PFLPに残ったためである。アブハニはそうした党内矛盾を意に介さず、「アウトサイドワーク」は「闘いだけが組織を造る」と、新しい対イスラエル戦の準備に集中していったという。そのうちの一つが、後のバーシムらが担うこととなるリッダ空港（テルアビブ空港）襲撃作戦である。

## 「ここは何処、明日への旅路」を読んで

重信房子

小嵐九八郎著「ここは何処、明日への旅路」(アーツアンドクラフト社刊)を読みました。これは新左翼運動の中で活動した、一人のエピソードに込めた、ひとつの総括の物語です。本の帯には「出所した党派初の「軍人」を待っていたのは組織の分裂」とあります。新左翼運動の60年代から70年代の、闘いの負の遺産を背負い、生き、出所のその日その時から、自分の属する組織、社青同解放派の不穏な分裂の兆しに直面します。それでも、最も信頼したリーダーの海原一人(内ゲバで革マル派に殺されたリーダーだった中原氏がモデルと思われる)の遺言「組織を分裂させるな」を胸に、組織メンバーとして再び闘いを決意する1947年生まれの主人公、地曳努。地曳努の葛藤と決断の物語として描かれています。

主人公地曳は、東大安田講堂攻防の1月18・19日以前の闘いで、攻防戦の数日前に逮捕され、1年2か月振りに1970年3月保釈されます。彼は1968年に結婚しており、収監中に息子が生まれていました。この時は、保釈後も海原一人の「非公然・非合法の力を、任務を」の言葉に忠実に、戸惑いをもちつつ戦線復帰しました。そして、1977年2月11日、仲間たちが最も信頼し、尊敬し、地曳も敬愛したその海原一人が「K派」に鉄パイプで滅多打ちされ殺されます。この悲報に地曳は「驚きよりは落胆で腰から崩れた。腰骨の芯の力が俄かに抜けた」という激しい衝撃と感情と使命感に突き動かされます。「内ゲバ」より対権力闘争をどうするのか……という葛藤より、「当分、命も心も海原氏の復讐戦に賭けるしかない」と、その使命に突き進むのです。仲間たちも、様々に葛藤を抱えつつ、また組織内の分裂の兆候も気にしながら進み、報復戦で何人もの「K派」を葬っていく解放派の先頭で闘い抜く地曳。ところが、1977年6月に逮捕されてしまう。

以来1982年まで、新潟刑務所で受刑者として暮

らすこととなります。ところがある日、妻は刑務所に面会に来る途中、交通事故に遭って死去してしまいます。その後出所した地曳は、社青同解放派の分裂の危機にある党内2つのグループという現実に直



面します。そしてまた、妻の実家で義父と妻の妹に育てられてきた息子、別れた時6歳だった息子と対面し、家族に対する責任にも直面します。組織からの指示と家族に対する責任に引き裂かれ、悩みつつ過ごしていきます。地曳の出所時、すでに13歳になっていた息子への湧き上がる愛情もあります。結局、妻の妹と再婚し、生活費を稼ごつつ、引き続き組織の指示任務を受けながら生活していきます。

大学生になり、早稲田大学に入学した息子が、ヨガ・宗教に熱中し、オウム真理教へと傾斜していることを、息子の教師だった女性から知らされました。オウム真理教の出家を決断するかもしれない合宿への参加を知らされた地曳。妻と相談し、妻が手渡した「振り粉木棒」を武器に、ゲバルト戦で培った杵柄で実力闘争をもって息子を奪い返すために出撃。息子のアパートには、すでに3人の教団幹部の男たちが息子を説得中。乗り込んできて3人の幹部と渡りあう父に息子は感激し、息子に励まされて「振り粉木棒」でゲバルト戦に勝利。その後すぐ、教団から身を隠すため、かつての解放派の仲間、すでに「脱落」し、新潟の農家の実家に戻って働いている帯田のもとに向かい

ます。その地で、息子は帯田らが支える農業や、どぶろく造りに励み、小説も書いてみたいと言い、結婚もしてそこで生き暮らしはじめます。そんな息子が眩しい父、地曳は。その地の素朴で、もろ人間らしい人々、走り回る子供達の生活者の生き様に圧倒され、息子やそんな人々を見ながら、地曳は遂に社青同解放派を離脱することを決断する。その気持ちは青空のように明るい。

そんな粗筋を書くと、小説の良さを損なってしまうのですが、これまで何冊か読んだ小嵐九八郎の小説の中で、私には一番胸に響く物語です。著者の小説は、プロセスを読ませる諧謔、自虐、懺悔の脱線、エロチズム、M・L主義とそれへの疑問符などが持ち味なので、荒筋で迎ってしまうと面白さを消してしまうかもしれません。でも、著者自身が地曳と同じように、逮捕・受刑生活を過ごし、社青同解放派のカードとして、超ラジカルな役割を果たしてきたので、どの部分を追っても「小嵐節」のみならず、著者自身が姿を現します。著者の、とても辛いことを照れを諧謔に包みながら、ひょうひょうと物語を進める点で、私にては一番味わうことが出来た小説です。今回3作目となる新左翼活動の小説化ですが、斜に構えた総括シリーズを引き続きものにしてほしいと願っています。尚、この本は検閲によって当センター

の調査対象となりました。そして、結局101頁の6行目と7行目を抹消の上交付することに同意して、本を手にすることが出来ました。抹消部分は、著者自身が経験したと思われる、刑務所暮らしのひとこまのところ。「～自分は運動会の準備に託けて工場に隣接している二十畳の、一応『工場兼倉庫』の部屋で、外部の業者がわざと残した煙草の吸殻を、マッチやライターはないので—以下抹消50字—運動会の看板作りを学生運動の杵柄で～」と続きます。何かそこに秘訣でも記されていたのかもしれませんが。本の展開は、教養が土台になっているので、私には読んだことの無い題名の本などが多く出てきますが、それは読み飛ばしつつ楽しんで読みました。

2021年3月28日 記

155号の誤植の訂正とお詫び

- 2頁左から2番目の歌 挟み→悼み
- 10頁左列下から6行目 アルガン→アラガン
- 10頁右列上から2行目と4行目 自立性→自律性
- 11頁左列上から1行目 パールベック→パールベック
- 11頁左列上から8行目 パールベック→パールベック
- 14頁左列上から11行目 3児で→3児の父で
- 16頁左列上から9行目 シェークジャラ  
→シェークジャラ
- 20頁左列上から14行目 淳→純一

後記

気がついたら、もう年の瀬です。今年を振り返ると、世界中が、新型コロナウイルスの測り知れない破壊力を前に、多くの犠牲者を出し右往左往する中、人びとは顕在化した様々の矛盾と不安と不公平に直面しています。一方、ウイルスは日々自己変革で強くなり、人びとはさらに慌てふためいているように見えます。これは、自己中心的に地球上に増え続けた人類への、自然界からのパンデミックなパニッシュメントかも知れません。問題は医学的にだけ解決しようとしても難しいでしょう。言い換えれば、世界が一つになって、平等な社会を作り出すことによってしか、問題解決への道は開けてこないのではないのでしょうか？

重信さんも書いていますが、長いと受け止めた判決を受けた時の不当な20年の刑期もあと5か月で満期です。いろいろと学習されていますが、20年を超える塙の中の生活による歪みは、身体的にも社会的にも蓄積されていることでしょう。出獄とは、それらを克服する彼女の新しい闘いの始まりということでもあります。読者の皆様、この彼女の闘いへの様ざまのご支援をどうぞよろしくお願い致します。

新しい年が、皆様にとって、健やかで爽り多く幸せな年となりますよう、心よりお祈りしております。共に。(Y)

重信房子さんへの郵送アドレス 〒196-0035 東京都昭島市もくせいの杜2-1-9 重信房子

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

支援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

頒布価格 500円